

編集後記

『早稲田オペラ／音楽劇研究』第3号（2020-2021 年度合併号）をお届けいたします。第2号同様、本号も合併号となっております。

第3号には3本の論文を掲載しております。本誌では毎号テーマを掲げており、創刊号の「モンテヴェルディから広がるバロック・オペラの世界」、第2号の「オペラと現代」に続き、本号は「オペラとメディア」といたしました。2021 年度には当オペラ／音楽劇研究所主催のイベントとして、アイルランド国立メイノース大学音楽学部のカリスタ・モリス教授を招いて、シンポジウム「オペラとメディア」が開催される予定でした。研究所主催のシンポジウムと本誌の連動は創刊号でも実施されており、本号でも多くの投稿が期待されましたが、残念ながら新型コロナウイルスの蔓延によりモリス氏の来日が叶わず、シンポジウムは中止となってしまいました。そのような状況ではありましたが、登壇予定であった山田小夜歌氏の論文が今回掲載されております。山田氏の論文は、19 世紀のイギリスのミュージックホールにおけるバレエについて、そのパフォーマンスを通して表現される社会の変化や愛国心を、またバレエのメディアとしての役割を説くものです。さらにテーマ外の募集からは2本が掲載となりました。井上登喜子氏の論文は、大正と昭和初期の日本において、ビゼーの《カルメン》を対象に、オペラ上演に先立ってオペラ抜粋曲が教育現場や学生オーケストラなどの演奏会を通して受容されたことを解き明かしたものです。そしてニューエル アントニー氏の論文は、19 世紀のピアノの名手としてリストと並ぶ鬼才であったタールベルクを取り上げ、進化したピアノでオペラを演奏するという技巧を示した彼が、同時代のピアニストたちへ与えた影響からその功績を再評価するものです。

前号の刊行後、やはり新型コロナウイルスの影響により本号編集委員会の始動は遅れることになりましたが、所長の声掛けのもと、2020 年 12 月よりオンラインというかたちで動き出しました。ミーティングはすべてリモートで行うことになりましたが、無事に刊行までたどり着くことができ、執筆者の方々、快く査読にあたってくださいました方々、そしてご協力いただきました全ての方々に、心より御礼を申し上げます。『早稲田オペラ／音楽劇研究』第3号が、多くの研究者・演奏者をはじめ、オペラ／音楽劇を愛するすべての方々のお役に立つことを願います。

（2022 年 3 月 31 日 萩原 里香 記）

本号の論文は以下の方々へ査読をお願いいたしました。ここにお名前を記し、感謝申し上げます。

大西由紀 笠原真理子 小石かつら 佐藤英 平野恵美子 山本まり子
（敬称略、五十音順）

編集委員

大河内文恵 荻野静男 舘亜里沙 萩原里香 森佳子
（五十音順）